

# 外国語教育メディア学会 (LET)

## 関西支部 2018 年度春季研究大会

### 発表要項集



日 時： 2018年5月26日（土）10:15～17:50

場 所： 千里ライフサイエンスセンター

Senri Life Science Center

〒560-0082 大阪府豊中市新千里東町 1-4-2

<http://www.senrilc.co.jp/>

主 催： 外国語教育メディア学会 (LET) 関西支部

<http://www.let-kansai.org/>

事務局： 外国語教育メディア学会 (LET) 関西支部事務局

〒112-8551 東京都文京区春日 1-13-27

中央大学 理工学部 山西博之研究室内

Tel. 03-3817-1715 (代表)

E-mail: [kansailet@gmail.com](mailto:kansailet@gmail.com)

# プログラム

9:45-15:50	受付■ ロビー (5 F)
10:15-10:30	開会行事■ ライフホール (5 F) 司会◆山西 博之 (事務局長・中央大学) 挨拶◆杉森 直樹 (支部長・立命館大学)
10:40-12:00	ワークショップ1 ■ ライフホール (5 F) (当日先着順で40名まで) 「Creating input rich English lessons in English: Small talk and Gestures」 講師◆佐藤 臨太郎 (奈良教育大学) 司会◆今井 由美子 (同志社女子大学)
	ワークショップ2 ■ サイエンスホール (5 F) (当日先着順で40名まで) 「コミュニケーション課題の準備と活動の計画における留意点」 講師◆松村 昌紀 (名城大学) 司会◆上田 洋子 (大阪女学院大学)
	ワークショップ3 ■ 502/503号室 (5 F) (当日先着順で40名まで) 「機械翻訳を外国語教育に活用する」 講師◆山田 優 (関西大学) 司会◆近藤 瞳美 (京都外国語大学)
10:00-16:00	業者展示■ ロビー (5 F)
12:00-13:15	昼食
	運営委員会■ 502/503号室 (5 F)
13:20-13:50	支部総会■ ライフホール (5 F)
14:00-15:10	研究発表・実践報告・教材開発 ①14:00 - 14:30 ②14:40 - 15:10
	第1室 (研究発表・実践報告) ■ サイエンスホール (5 F) 司会◆大塚 朝美 (大阪女学院短期大学)
	①人工知能を英語授業にどう活用するか: 機械翻訳を用いた Content-Based Instruction について 矢野 浩二朗 (大阪工業大学)
	②Making a point: How teachers create grades in the Japanese university EFL classroom GROGAN, Myles (Graduate student, Kansai University)

	<b>第2室（実践報告・教材開発）■ ライフホール（5F）</b> 司会◆池田 真生子（関西大学）
	① 中学一年生を対象とした英語発音教材開発：強弱リズムと母音を中心として 中野 里香（関西大学大学院生）
	② 手作り発音譜でTOEIC Lスコアアップを目指す 西浦 ミナ子（京都産業大学）
15:10-15:40	休憩
15:40-17:40	<b>シンポジウム■ ライフホール（5F）</b> 「インプットとアプロトプットを統合した活動と評価」 講師紹介◆名部井 敏代（関西大学）
	講 師◆松村 昌紀 先生（名城大学） 「言語教育における探索・経験・創発」
	佐藤 臨太郎 先生（奈良教育大学） 「EFL環境での『理解→練習→使用』という流れの授業において」
	今井 裕之 先生（関西大学） 「統合型言語活動の指導と評価の課題」
17:40-17:50	<b>閉会行事■ ライフホール（5F）</b> 司会◆山西 博之（事務局長・中央大学） 挨拶◆小山 敏子（副支部長・大阪大谷大学）
18:00-20:00	<b>懇親会■ 千里ルームA（6F）</b> 司会◆名部井 敏代（関西大学） 挨拶◆野村 和宏（副支部長・神戸市外国語大学）

## お知らせ

- 参加者は、受付にて必ず参加登録票にご記入のうえ、ネームホルダーをお受け取りください。LET会員の参加料は無料です。非会員の方は当日会費2,000円（大学院生は学生証を提示していただくと1,000円）を受付でお支払いください。また、学部生は無料でご参加いただけます。なお、支部大会当日にご入会いただくことも可能ですので、支部事務局（受付）までお申し出ください。
- 昼食は会場周辺（千里中央）の飲食店等をご利用ください。会場の5階にはCafé & Restaurant Port 5もございます。
- 本大会においては、会場の都合上、休憩室はございません。
- 館内は全面禁煙です。
- 懇親会は千里ライフサイエンスセンター6F「千里ルームA」にて開催いたします。参加費は2,000円（学生1,000円）です。当日受付にてお申し込みください。

## インプットとアウトプットを統合した活動と評価

パネリスト

松村 昌紀 (名城大学)

佐藤 臨太郎 (奈良教育大学)

今井 裕之 (関西大学)

本年度告示された学習指導要領では、これまでの方針にも増して、4技能を統合した指導や、活動を中心とした指導に重点が置かれている。そこで本シンポジウムでは、外国語能力が確実に向かう指導方法、そして指導と表裏一体である評価方法について、様々な観点から理解を深めたい。

### 言語学習における探索・経験・創発

松村昌紀 (名城大学)

#### 1. はじめに

認知・表象主義的な第二言語習得モデルにおいて、習得とは入手したデータから言語的表象を形成することであり、その表象（あるいは言語システム）の存在が表出を可能にすると考えられている。そこに存在するのは一方向的な情報処理の考え方であり、しばしば用いられる「インプット」（ときには言語「データ」）、「アウトプット」、「システム」といった語そのものが、習得がコンピューター・メタファーによって理解されてきたことを示している。表象至上的で一方向的な言語学習の捉え方は、第二言語の指導と学習をめぐる議論にも「知識とその活用」、「基礎・基本とその応用」、「理解から表出へ」といった形でしばしば顔を覗かせる。しかし私たちがこれらを金科玉条として掲げ、指導について構想することは常に生産的なことのだろうか。

#### 2. 学習における探索・経験・創発

（乳）幼児は自らが「できること」を、探索的に世界と関わることを通して拡張していく。生得的特質と見なされている認知能力もそうした経験的な基盤の上で発現し、発達を遂げるのであり、環境と個体との間の相互的交流なしに発達しないのは母語もまた同様である（藤永, 2001など）。教育心理学の領域では、探索的な問題解決活動を経て事項の解説を行うことの効果が示されている（例えば数学的概念の獲得に関して Schalk, Schumacher, Barth, & Stern, 2017）。第二言語の習得でも、学習者の経験と構築される表象、そしてパフォーマンスが完全な対応を示すわけではない（Benati & Lee, 2008など）。これらの事実の中には、私たちが「インプットからアウトプットへ」という思想、およびそれら二者が（順序がどうあるべきか、統合されるべきかどうかより以前に）そもそも別のものであるとする前提を再考してみるための根拠を見出だせそうである。

#### 3. 言語教育における発想の転換と指導の構成

探索的で有機的・統合的な経験の場として言語教育を構想することは、還元主義的で項目蓄積的、線的な言語発達観を脱却することを意味する。そのときに必要とされる新たな視点や発想の転換について、具体的な論点に即して検討していこう。例えば、用いるべき表現を与えられていない学習者は貧困なパフォーマンスに終始して課題の達成もままならず、そこから言語的洗練を導くこともまた難しいのだろうか。扱うべき内容の検討やコースの設計は何を基準に行うべきで、評価にあたって指導者にはどのような態度が求められるのだろう。それらの事項の検討を通して、理論的な整合性と実行可能性をともなった言語教育の姿を浮かび上がらせたい。

#### 参考文献

- Benati, A. G., & Lee, J. F. (2008). Grammar acquisition and processing instruction: Secondary and cumulative effects. Bristol: Multilingual Matters.
- 藤永保 (2008).『ことばはどこで育つか』東京：大修館書店。
- Schalk, L., Schumacher, R., Barth, A., & Stern, E. (2017). When problem-solving followed by instruction is superior to the traditional tell-and-practice sequence. Journal of Educational Psychology, Publish Ahead of Print, December, 2017.

## EFL環境での「理解→練習→使用」という流れの授業において

佐藤臨太郎（奈良教育大学）

日常生活においてほとんど英語に触れる機会・必要がなく、生徒も限られた学校での授業時間で、教科の1つとして英語を学んでいるEFL学習環境においては、明示的知識の獲得と使用を重視した「理解(Presentation)-練習(Practice)-使用(Production)」を基本とするインプットからアウトプットへの流れがふさわしいと考える。しかしながら、この伝統的なPPPでは言語習得に不可欠な潤沢なインプットを与えられず、不自然なアウトプットを学習者に強いてしまう等の問題が指摘されており、「理解→練習→使用」という流れを基本としながらも、大修正が必要である。本議論においては、どのようにこれらの問題を克服し、生徒に潤沢なインプットを与え、アウトプットへつなげていくかを提案し、インプットとアウトプットの統合の可能性について検討していきたい。議論においては、主に理論的背景や授業での実践に触れることになるが、特に今回は内発的動機付けや、学習マインドセットなどの生徒の情意面からも考えてみたい。「頑張ればできる」という信念、「努力と能力は同じ方向を向いており、努力によって得られた能力はどこまでも変化・成長し続ける」という成長マインドセット(Mercer & Ryan, 2009; 奈須,2017など)を学習者の中に育てることは非常に重要であるが、そのためには、有意味な主体的な学習の場において、「頑張ったから結果が得られた」という達成感、成功体験を持ってもらうことが不可欠であると考える。本議論では、どのようにこれを実現可能とするかについて、私自身の日本での英語習得(学習)観、学習発達観と関連させ述べていきたい。2人のシンポジストやフロアの方との積極的な熱い意見交換を期待している。

時間が許せば、評価については、自分の疑問を投げかけ、他のシンポジストや皆さんのご意見を伺いたい。

### 参考文献

- Mercer, S., & Ryan, S. (2009). A mindset for EFL: Learners' beliefs about the role of natural talent. *ELT Journal*, 64(4), 436-444.  
奈須正裕 (2017) 『「資質・能力」と学びのメカニズム：新学習指導要領を読み解く』東洋館出版.

## 統合的な言語活動の指導と評価の課題

今井裕之（関西大学）

### 英語教育改革の現状

大学入試改革によるスピーチングとライティングのパフォーマンス評価の導入、Can-Do リストによる到達目標の提示、「インプット」と「アウトプット」の統合的な言語活動の促進、対話的、主体的で深い学び（アクティブラーニング）、思考力・判断力・表現力の育成と評価など、現在の学校英語教育は、全方位的（目標、指導、評価）な改革要求に晒されている。本発表では、インプットとアウトプットを統合した言語活動の指導と評価の問題について議論したい。もし指導者が「指導は技能統合型なのに評価は技能別で実施するのか？」「統合的言語活動を実施しつつ、語彙 4000-5000 語を目標とする授業展開は可能なのか？」等の問い合わせについて、なんらかの答えを持たなければ、学校英語教育実践は混乱し授業実践が立ち行かなくなる。

### 学習指導要領と統合的言語活動

今回改訂される学習指導要領が、統合的言語活動を促進していることは、特定の指導法や言語習得観に依拠していると思われる点で、一步踏み込んだ提案と考えられる。

「統合型言語活動」は、高等学校学習指導要領（平成 30 告示予定の案）によれば「（5つの領域のうち）複数の領域を結び付けた統合的言語活動」とされ、「情報や考えなどを的確に理解したり適切に表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力」の育成を目標とする。その特徴は、これまでよりも自然な言語使用の目的、場面、状況のなかで「インプット=聞くこと、読むこと」に応じた「アウトプット=話すこと、書くこと」をする点にある。また、話す活動を行なったあとに、話した内容を書いてまとめるなど、自らの「アウトプット」を「インプット」として別の技能で「アウトプット」するタイプの統合型活動もある。

### 学習指導要領と言語習得観

「統合的言語活動」に加えて、英語教育改革を促すほかのキーワードを整理すると、今回の改革が指導法の提案にとどまらず、言語習得観も示しているように思われる。

- 目標：Can-Do リスト
- 指導：統合型言語活動、対話的・主体的・深い学び（アクティブラーニング）
- 評価：パフォーマンス評価、思考力判断力表現力の評価

これらの目標、指導、評価に関わるキーワードを総合して解釈すると、具体的な言語使用記述（能力記述文）を目標として段階的に設定し、統合的言語活動を行う「対話的、主体的で深い学び」によって思考力判断力表現力を養い、その成果をパフォーマンステストで評価することから、学習者相互の言語使用行為（パフォーマンス）が言語学習を貫く軸になっていることがわかる。これは言語知識の理解・定着・運用を軸にした学習モデルとはアプローチが異なる。大きな指導方法と言語習得観の転換が迫られる今日の英語教育の課題を、具体事例を交えて議論したい。

### 参考文献

文部科学省(2018).『高等学校学習指導要領（案）』<http://search.e-gov.go.jp/servlet/PcmFileDownload?seqNo=0000170358>

# Creating an input rich English lessons in English

## : Small talk and Gestures

Rintaro Sato (Nara University of Education)

In senior high school, teachers are supposed to conduct their lessons mainly in English, and this principle will be applied to junior high school as well. In the WS, after thinking about the purposes of English-medium lessons, we will discuss how effectively teachers can conduct English lessons in English in Revised Presentation-Practice-Production (RPPP) based classes. Although the RPPP approach is a teacher-learner friendly approach effective in the Japanese EFL environment (佐藤他,2015), caution has to be paid to create input rich English lessons. This WS focuses on small talk and gestures that can provide students with comprehensible, *i* + 1 input, a little bit beyond learners' current level of English (e.g., Krashen, 1985).

Small talk is a talk given by the teacher at the start of the lesson with linguistic and conversational adjustments so that students can comprehend well while possibly learning new knowledge. In the WS, after crucial features of small talk are explained, participants will experience effective small talk.

In EFL classrooms, such as in Japan, student L2 knowledge and skills are often limited, making it difficult for them to understand L2 input from teachers. Gestures can be possible "helping hands" in that they can modify verbal input to make it more comprehensible (Sato, 2018). After various types of gestures and their effects are discussed, we will consider how teachers can create effective gestures.

### References

- Krashen, S. (1985). *The input hypothesis: Issues and implications*. New York: Longman.  
Sato, R. (2018). Examining EFL Teachers' Non-verbal Behaviors in English-medium Lessons. *The Journal of Asia TEFL*. 15, 82-98.  
佐藤臨太郎,笠原究,古賀功.(2015).『日本人学習者に合った効果的英語教授法に入門』東京: 明治図書.

## コミュニケーション課題の準備と活動の計画における考慮点

松村昌紀（名城大学）

### 1. 背景と趣旨

言語教育の実効性はいつの時代にも求められてきたが、近年の日本の英語教育ではその改善を指向して、指導者の英語運用能力や学習成果に関する目標の明示、機能的観点から記述された Can Do 目標の準備、「アクティブ」な学習形態の模索や情報機器の導入などがトップ・ダウンかつノルマ提示的に進められてきた。しかし、それらの動きの中に指導方法論や用いられる課題に対する視点を見出すことはほとんどできない。その背後には指導法の唱導と否定の歴史を背景とした、指導方法の議論に対する忌避感があるのかもしれない。文学や言語学的な素養を重視して「アンチコミュニケーション」な指導の意義が語られることさえある。

どのような政策や外的環境のもとであれ、実際の授業を構成するのは教室で学習者が取り組むための課題であり、Ur (2015) も強調するように、学習者を動かしてその技能を高めていくのはそれらの課題の力である。このワークショップでは、近年のコミュニケーション課題に関する議論でわかりにくくとされてきた点を中心に、課題の準備と使用における工夫について考えていきたい。

### 2. 概要

言語教育の研究では、やり取りの現実性を確保しながら言語の理解や表出を促す課題の特性や、それらを用いることの効果などが精力的に探索してきた。しかし、少なくとも現時点では研究者が提示するフレームワークやプログラム構築に関する主張（例えば Long, 2015; Robinson, 2017）から実際の教室における指導を構想し、課題の準備や使用において有効な指針を読み取ることは難しい。このワークショップでは「練習」(exercises) と「課題」(tasks) の境界を確認したうえで後者に焦点を当て、その分類およびタイプごとの特性を理解するための枠組みを示す。さらに学習者の習熟度や教室の物理的・時間的制約などに応じて、課題の準備と使用それぞれの局面でどのような調整が可能で、それらがどのように教室活動の幅を広げることになるのかを検討していく。

### 3. 進行

導入ではコミュニケーション課題の特徴やそれらの分類方法を提示する。その後、参加者のアイデアを募りながら、種々の課題を用いる際に変更可能な側面や授業展開の可能性について考えていきたい。時間が許せば、課題のタイプや調整のもたらす効果について体験的に理解していくだけるかもしれない。

### 参考文献

- Long, M. (2015). *Second language acquisition and task-based language teaching*. Chichester: Wiley Blackwell.
- Robinson, P. (2015). The Cognition Hypothesis, second language task demands, and the SSARC model of pedagogic task sequencing. In M. Bygate (Ed.), *Domains and directions in the development of TBLT* (pp. 87-121). Amsterdam: John Benjamins.
- Ur, P. (2015). *Discussions and more*. Cambridge University Press.

## 機械翻訳を外国語教育に活用する

山田 優（関西大学）

2016年の秋にGoogleが人工知能の技術の一つであるニューラルネットワークの深層学習（ディープラーニング）を応用した新しい翻訳システムを発表して以来、機械翻訳の翻訳品質が飛躍的に向上しました。ニューラル機械翻訳の日英翻訳の実力を英文ライティング能力と捉えて、その実力を検証するとTOEIC 900点相当するとも言われます（みらい翻訳 2017）。機械翻訳の技術が進歩して、もはや英語などの外国語を勉強する必要がなくなるのではないか、というようなことが言われるようになってきました。

このような状況の中で、外国語教育の現場においては、機械翻訳に対する正しい理解が求められています。本ワークショップでは、TILT（Translation in Language Teaching = 「翻訳」の外国語教育への応用／SLAにおける「訳」の復権）（Cook 2010）という考え方に基づき、現状の機械翻訳の仕組みと実力について理解し、機械翻訳を外国語教育に活用する方法を学びます。

機械翻訳の訳文の中に誤訳やエラーは存在しますので、学習用に利用するためには、まず現状の機械翻訳のエラーの癖や傾向を把握しておく必要があるでしょう。これらを見極めた上で、授業で活用できるアクティビティを紹介します。

具体的にはプリエディットとポストエディットと呼ばれる翻訳手法を応用します。プリエディットとは、機械翻訳にかける前の原文を修正しておいて、機械翻訳にかけて出力される訳文の品質を向上させる方法です。これに対してポストエディットとは、機械翻訳された訳文を修正して品質を上げる手法です。これらの手法の外国語教育への応用については、Shei (2002)、Niño (2008)、Garcia & Pena (2011) の先行研究が存在します。本ワークショップで紹介するアクティビティはこれらの先行研究を参照しつつ、オリジナルの練習法も加えました。

扱う言語の組合せは、日本語と英語のみです。個人所有の電子端末（ノートパソコン、タブレットなど）の持ち込みを奨励します。持ち込まれた端末はインターネットに接続しておいて頂けますよう、ご協力のほどよろしくお願ひ申し上げます。

### 参考文献

- Cook, Guy. (2010). *Translation in language teaching*. Oxford: Oxford University Press.
- Garcia, I., & Pena, M. I. (2011) Machine translation-assisted language learning: writing for beginners, *Computer Assisted Language Learning*, 24:5, 471-487.
- Niño, A. (2008). Evaluating the use of machine translation post-editing in the foreign language class. *Computer Assisted Language Learning*, 21(1), 29-49.
- みらい翻訳 (2017) 『TOEIC900点以上 英作文能力を持つ 深層学習による機械翻訳エンジンをリリース』 Retrieved January 23, 2018, from  
<https://miraitranslate.com/uploads/2017/06/2d5778dcdee47e4197468bc922352179.pdf>
- Shei, C-C. (2002). Teaching MT through pre-editing: Three case studies. In 6th EAMT Workshop Teaching Machine Translation (pp. 89-98). Retrieved January 23, 2018, from <http://www.mt-archiveinfo61/4EAMT-2002-TOC.htm>

## 人工知能を英語授業にどう活用するか：

### 機械翻訳を用いた Content-Based Instruction について

How to Use Artificial Intelligence Effectively in English Language Classrooms: A Content-Based Instruction Using Machine Translation

矢野 浩二朗(大阪工業大学)

キーワード： 人工知能、機械翻訳、Content-Based Instruction

#### 1. はじめに

最近のビックデータの蓄積と深層学習技術の進歩により、人工知能の機能と利便性は飛躍的に向上した。Google 翻訳などの機械翻訳も、日常で使う上では問題のないレベルにまで達しているとされている。このような中で、人工知能や機械翻訳をどのように英語授業に活用するかは、学習者と教員、双方にとって大きな課題である。さて、Content-Based Instruction (CBT: 内容中心教授法) は教科内容を外国語で学習する教授法 (Allen-Tamai 2015) であり、道具としての英語を学習するには優れた方法であるが、学習者の英語力が限られる場合、表現したいことを伝えきれない問題がある。そこで、今回は機械翻訳を使って学生の英語表現力を拡張することで、より高度な内容をテーマとした CBT を行うこと目標とし、教育実践を行った事例を報告する。

#### 2. 参加者と手順

参加者は、情報系学部 3 年生の英語授業の受講生 35 名である。授業の目的として「英語で情報技術を学ぶ」があり、最近重要になっている情報技術の一つであるバーチャルリアリティ (VR) について、3-4 名のグループを作り、各々テーマを決めて調査を行い、模擬的な学会形式で発表を行った。発表は予稿、口頭発表、ポスター発表に分かれ、それぞれ原稿、スライド、ポスターを英語で作成する。この際、機械翻訳を使うことを明示的に許可し、Google 翻訳サイトでの翻訳の手順、back translation (Shigenobu 2007)、Text To Speech 機能による英文発音の確認の方法も指示する。予稿の発表は原稿を読みながら行うが、口頭発表についてはレジュメを見ることはできず、スライドだけを使って発表する。ポスター発表では、各チームが互いに質問を英文で提出し、それに対する回答を同じく英語で行う。

#### 3. 結果と考察

授業を行った結果、グループによる調査、予稿の作成、発表については受講生全員が参加できた一方で、口頭発表については、多くの脱落者が見られた。また、予稿についても、同じ機械翻訳サイトを使っていると思われるにもかかわらず、英語の質には大きなバラつきが見られた。これは、機械翻訳が提示する英文の質を、リーディングスキルが低い受講生は評価できないからではないかと推測される。

#### 参考文献

- Allen-Tamai, M. (2015). 内容を重視した外国語教授法. *ARCLE REVIEW*, 10, 53-63.  
Shigenobu, T. (2007). Evaluation and usability of back translation for intercultural communication. Usability and Internationalization. *Global and Local User Interfaces*, 259-265.

# Making a point: How teachers create grades in the Japanese university EFL classroom

成績評価法：日本の大学 EFL クラス活動と成績について

Grogan, Myles (PhD Candidate, Kansai University Graduate School of Foreign Language Education and Research)

キーワード： Classroom-based assessment, testing, teacher practice

## 1. Introduction

There is increasing recognition that classroom-based assessment differs on a fundamental level from large-scale testing. Among others, Fulcher and Davidson suggest that as development is the goal, traditional testing concepts of validity and reliability “can sometimes be very damaging to institutions and teachers” (Fulcher & Davidson, 2007, p. 29). If such concepts are not appropriate, then what impacts teachers’ grading decisions in a classroom setting?

## 2. Method

This interview study looks at nine contract teachers in a private university in Japan, teaching a compulsory English speaking and listening course. The teachers were interviewed at the beginning of the course and again after they had delivered their grading decisions. Through memo-writing and constant comparison, the author used key observations to develop a model of the grading process.

## 3. Main findings

Key findings encompass (a) general assessment practices, (b) the social impact of grading activities, and (c) adaptation or vetting of numbers for the administration. Assessment practices were unique to individual teachers, developing as the semester progressed, based on classroom experience and interaction with students. Little peer discussion of such plans took place. Perhaps in response to limited assessment criteria, teachers paid close attention to the social impact of assessment (consequential validity) and washback. For example, many teachers had penalties for late work. Before final grades were given to the institution, overall fairness of scores was considered by some. Participants graded under a perceived shadow of possible repercussions (student complaints, non-renewal of contract, etc.). While this was predominantly based on experiences outside the institution, it impacted grading process at a fundamental level.

## 4. Conclusion

The factors identified in this study have allowed for the development of a possible model of grading practices in the context, and perhaps in other settings like it. The data suggest that validity is based on trust and good working relationships. To that end, observations here indicate that more work is needed to build trust and understanding between stakeholders within a specific context, in order to meet the challenges and changes in academia and further afield.

## 参考文献

- Fulcher, G., & Davidson, F. (2007). *Language testing and assessment: An advanced resource book* (New edition). Abingdon, England; New York: Routledge.

# 中学一年生を対象とした英語発音教材開発： 強弱リズムと母音を中心として

Developing Teaching Materials for English Pronunciation:  
Focusing on Rhythm Strength and Vowels

中野 里香(関西大学 大学院生)

キーワード： マザー・グース， 超分節素， 分節素

## 1. はじめに

2020年に開催予定の東京オリンピックをはじめとする日本の国際化を見据えて、2017年3月に新学習指導要領が公示された。より具体的で細かい指導目標、外国語活動の前倒し等といった外国語教育政策が強化される一方、現在の日本の英語教育は課題を抱えている。例えば、生徒の英語力自体の問題だけでなく、中学生の好きな教科で英語は最下位になる等の情意上の問題（ベネッセ教育総合研究所, 2015）や、小中連携に取り組んでいる中学校が8割近くに上る一方で、中学一年生の半数が「小学校英語は役に立っていない」と感じており、小学校英語と中学校英語の連携がうまくいっていない等の問題がある。

本研究では、上記の現状を考慮に入れ、マザー・グース持つ音声、文化、情意、英語教育面を検証する。加えて、小学校英語と中学校英語との橋渡しとなる役割を担い、発音や文化を学習する音声教材としてマザー・グースを提案する。

## 2. 本教材について

中学生の英語学習の現状とマザー・グースの持つ様々な特性を精査した上で、実際に中学一年生70名にニーズ調査を行い、どのような発音教材を発音学習に使用してきたのか、マザー・グースを知っているか、数曲のマザー・グースを実際に聞いてみてどう感じたか等を分析した。その結果、ニーズ調査を行った対象者の約8割がマザー・グースを知らなかったが、実際に音楽を聞いた後では、約9割がマザー・グースを使用した音声教材に肯定的な反応を示した。

ニーズ分析後、実際に発音教材開発に取り組んだ。具体的には、Kashiwagi & Snyder (2014)や河野(2007)を参考にして、日本人英語学習者が苦手とする強弱リズムと母音に学習項目を絞り、マザー・グースを用いて12の教材を作成した。各レッスンでは、単音の練習から始め、それを含む単語、文へと段階的に発音学習を行えるようにした。さらに、Audacityを用いて、視覚的に自分の発音をとらえ、学習の前後で音声波形がどの程度変化したのかを比較できるようにした。音声面の練習だけでなく、マザー・グースの特徴である英米文化や詩に関する情報をコラムとして紹介した。

## 3. 今後の課題

ニーズ調査をもとに今回作成した発音教材は、実際に学習者に使用してもらうことが必要であり、学習者の反応や学習効果について分析を重ねて、今後さらに改善を加える予定である。

## 参考文献

- ベネッセ教育総合研究所 (2015). 「第5回学習基本調査」データブック  
[http://berd.benesse.jp/up\\_images/research/5kihonchousa\\_datebook2015\\_all.pdf](http://berd.benesse.jp/up_images/research/5kihonchousa_datebook2015_all.pdf)
- Kashiwagi, A., & Snyder, M. (2014). Intelligibility of Japanese college freshmen as listened to by native and nonnative listeners. *JACET JOURNAL*, 58, 39-56.
- 河野 守夫編著(2007).『ことばと認知のしくみ』東京：三省堂 pp.255-264.

## 手作り発音譜で TOEIC L スコアアップを目指す

Pronunciation Instruction with “Pronunciation Score” to Improve TOEIC Listening Score  
西浦 ミナ子（京都産業大学）

キーワード： TOEIC Listening、音読、明示的指導

### 1. はじめに

英語リスニング力向上に、音読指導が効果的であることは多くの先行研究で明らかにされてきた（鈴木, 2009; 小野寺, 2016）。著者の TOEIC 授業(2014～2016 年度秋)でも音読は取り入れていたが、発音指導が十分にできていなかったことを反省し、2017 年度秋の授業では、リズム、イントネーションなどの超分節音素などもより意識できる方法を模索し、手作り「発音譜」を用いた指導を試みた。

### 2. 音読指導の方法・手順

対象者は初級(TOEIC 300～400 未満)の学部 1 年 55 名、同じく初級の 2 年 18 名、中級(400～520 未満)の 2 年 54 名である。音読指導の目的は「発音を音源に近づける練習を通して短期間で TOEIC L のスコアを上げる」ことであり、厳密に発音の正確性を追求するものではない。音読素材は 1 年次と 2 年次で異なるが、2 年次の初級と中級クラスでは同じ素材を使用した。手順は、1. パワーポイントで発音する際のコツ(発音譜と呼ぶ)を明示的かつ単純化し作成。2. 発音譜を見せながら音声を流し、学生は配布スクリプト上に必要な発音譜を書き込む。3. 教員の発音をリピート→音源でシャドーイングや同時読み練習。4. 授業外練習促進のため発音譜の JPG ファイルと、1 文ずつに切った音源を Moodle(学習支援システム)にアップ。次回授業で各自書き込みをしたスクリプト(教員の発音譜を印刷して使うことは禁止)を見て音読テスト。教員は各学生の音読音声を録音しながらリズム、イントネーション、発音、スピードの 4 項目を 3 段階で評価した上で、各学生に助言を行う。

### 3. 結果と考察

2014～2016 年度と 2017 年度の学期末試験(TOEIC IP)のリスニングスコアを各クラス別に比較した。

表1. 2014～2016 年度と 2017 年度のリスニングスコア比較

	2014～2016 年度	2017 年度	t 検定	効果量
	リスニングスコア	リスニングスコア		
初級 1 年	$M = 237.46, SD = 40.048 (n = 123)$	$M = 255.27, SD = 43.037 (n = 56)$	$t = -2.698, df = 178, p < .05$	$r = 0.20, d = 0.43$
初級 2 年	$M = 227.88, SD = 41.143 (n = 113)$	$M = 246.11, SD = 34.834 (n = 18)$	$t = -1.780, df = 129, p < .10$	$r = 0.15, d = 0.45$
中級 2 年	$M = 272.31, SD = 41.020 (n = 130)$	$M = 284.36, SD = 38.874 (n = 55)$	$t = -1.855, df = 183, p < .10$	$r = 0.14, d = 0.30$

t 検定の結果、初級 1 年では 0.5% 水準で有意差が、初級 2 年、中級 2 年では 10% 水準で有意傾向が見られた(表 1)。特に初級 1 年生に対する発音譜の指導が TOEIC L スコアアップに繋がる可能性が示された。音読指導で「下位の生徒の伸びが大きい」とする鈴木(2009)や“remedial-level”の学生に効果的とする中川他(2015)の指摘を支持する一方、同じレベルでも学年が下の学生に効果が出やすい可能性も示唆された。今後も工夫を重ね、レベルや学年を問わずスコアアップに繋がる方法を模索したい。

### 参考文献

- 鈴木寿一 (2009). 「「音読」こそがすべての基本—音読指導で生徒の英語力を向上させるための Q&A (特集 音読でどんな力を伸ばすか)」『英語教育』 58(9), 10-12.
- 小野寺進 (2016). 「英語リスニング能力を高める方法—発音記号と音読」『21 世紀教育フォーラム』 11, 11-19.
- 中川香予子, 大東万里絵, 林聖太 (2015). 「Focusing on Oral and Grammar Skills for TOEIC®」『JACET 中部支部紀要』13, 69-79.

Memo

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

## 会場への交通案内・会場案内図

- 地下鉄（北大阪急行電鉄）でお越しの方 御堂筋線 千里中央行終点「千里中央」駅下車（北出口すぐ）
- 伊丹空港からお越しの方 大阪モノレール 門真市行「千里中央」駅下車（徒歩約5分）
- 関西空港からお越しの方 (1) JR「新大阪」駅から地下鉄 御堂筋線「千里中央」行にお乗り換えください。  
 (2) 南海電気鉄道 「難波」駅から地下鉄御堂筋線「千里中央」行にお乗り換えください。



<http://www.senrilc.co.jp/access/index.html>



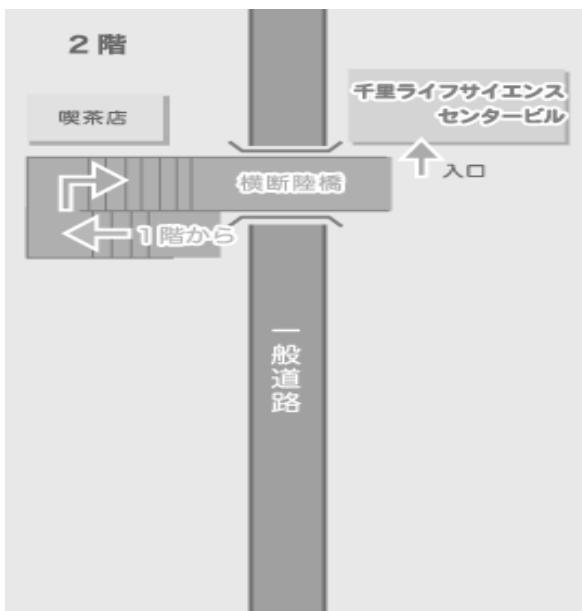
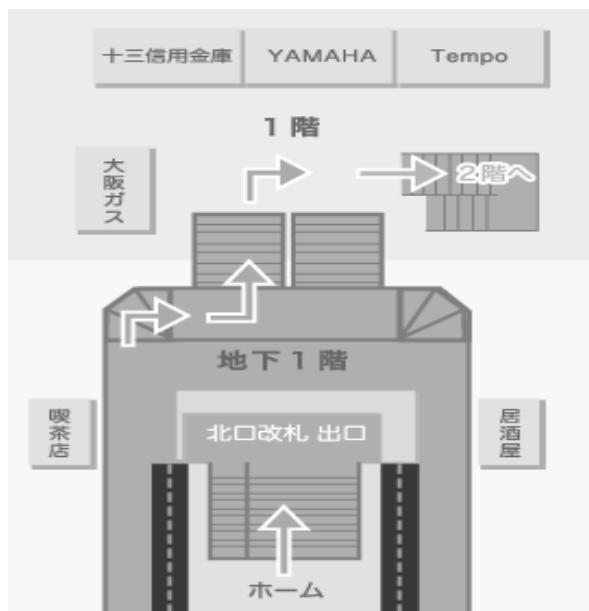
### ★千里中央駅周辺

会場の千里ライフサイエンスセンタービル地下には有料駐車スペースがあります（最初の1時間400円、以後30分毎200円）。

<http://www.science-forum.co.jp/img/maps/senri.htm>

### ★千里中央駅から会場

千里中央駅（終点）の「北口改札」出口（地下1階）から階段を利用し2階まで上がり、横断陸橋を渡ると、千里ライフサイエンスセンタービル入口があります。



<http://www.science-forum.co.jp/img/maps/senri.htm>

UCHIDA

英語 e-Learning  
システム

# ATR CALL BRIX

ATR CALL BRIX  
ATR Computer Assisted Language Learning System

4技能をバランスよく学習できるカリキュラムで、基礎力を養います。

オススメコース

## » 理工系学生のための英語力強化コース

- 書籍のパートにあわせたカリキュラムです。
- 単語や用例文の発音練習もできます。

COGET3300  
対応!

## » TOEIC® L&R テストトレーニングコース

- 2016年5月に改訂された新形式に対応した問題を収録しています。
- TOEIC®テスト形式以外の教材も豊富で、基礎力をつけながらスコアアップを目指せます。



全ての課題をスマホ・  
タブレットで学習できます

無料の専用アプリダウンロードはこちらから



Android



iOS



Advanced  
Telecommunications  
Research  
Institute  
International



ATR CALL BRIXは、ATRにおける約30年の研究成果から誕生したe-ラーニングシステムです。

株式会社 国際電気通信基礎技術研究所(ATR)

電気通信分野における基礎的・独創的研究の一大拠点として、産・学・官の幅広い支援を得て1986年に設立されました。3年後にけいはんな学研都市(京都府)に移って以来、けいはんなの中核研究機関としての役割を果たし、その最先端の研究内容と優れた研究成果により、世界的な評価を受けています。

内田洋行

[東京] 〒135-0016 東京都江東区東陽2-3-25 ☎ 03(5634)6402

[大阪] 〒540-8520 大阪市中央区和泉町2-2-2 ☎ 06(6920)2632

<http://www.uchida.co.jp/education/>